

「夢をはぐくむ学校づくり」

～一歩進んだキャリア教育～

静岡大学教育学部教授

弓野 憲一

キャリアとの出会い

20 数年前、アメリカのネブラスカ大学とコーネル大学で研修する機会に恵まれた。クッキーやおつまみを持ち寄って、気軽にひらかれる「ホームパーティ」の話題は、いつも決まって、いかにして「キャリア・アップ」を図るかであった。最初の内は、その意味が取れなくて、相づちが打てずに困った。よく聞いてみると、アメリカでは若い内は3年位で勤めを変える。それで、次の職を得るときには、前の職場で何をしていたかが問われ、そこでの仕事具合（キャリア）がプラスに評価されると、よりよい条件で新たなポジションが得られるという。すなわち、キャリア・アップするのである。

キャリア教育の必要性

日本の学校には、昔より「職業指導」「進路指導」、さらに卒業後にすぐ活用できる「職業教育」があった。これらによって、将来の進路や職業に必要な知識やスキルを身につけたのである。今なぜキャリア教育なのであろうか。この背後には、国際化・情報化・専門化した社会の急速な発展と、雇用形態の変化、勤労意識の低下等がある。終身雇用制が崩れ、多くの人が人生の中で何回も職場を変えることを余儀なくされる社会が到来したのである。そのような社会で有意義な人生を過ごすには、自己の適性或職業や勤労について知り、さらに現実社会に適応できる能力・スキル・態度等を身につけるとともに、キャリア・アップに必要なもう一段高い能力や態度やスキルを学校においても学ぶことが前提となる。若者の流出が止まらない地域の学校においては、通常のキャリア教育とともに、学校卒業後に、小さなビジネスを起こすに必要な資質、すなわち起業家精神を学校の中でつける工夫が必要となろう。

キャリア教育で育成すべき能力

国立教育政策研究所生徒指導研究センターは、キャリア教育で育成すべき能力領域として以下

の四つをあげている。①人間関係形成能力・他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・協同して物事に取り組む力、②情報活用能力・学ぶこと・働くことの意義や役割、および多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や生き方の選択に生かす力、③将来設計能力・夢や希望を持って、将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに将来を設計する力、④意思決定能力・力自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する力。

静岡県の子どもの将来への夢

県教委の「平成18年度小・中学校における児童生徒の意識調査の結果」によると、「将来かなえてみたい夢がある」という設問に対して、「よくあてはまる」と答えた子どもの割合は、小4（64.7%）、小5（57.6%）、小6（56.2%）、中1（46.9%）、中2（44.3%）となっている。「やや当てはまる」までを含めると、この数字はさらに高いものとなる。しかし問題となるのは、学年が進むにつれてその数字が急激に減少することである。

なぜこのように数字が急減するかに関しては、いくつかの理由が考えられる。成長するにつれて子どもは世の中の仕組みがわかるようになる。現実の自分についてもより客観的に評価するようになる。学校で学ぶ内容は「学問的:アカデミック」であり、日々の生活や将来の職業との結びつきが薄い、等があげられよう。各教科や総合的学習の時間、地域の活動が充実している学校の生徒が、中学生になっても「実現したいリアルな夢」を多くもっているとしたら、キャリア教育としても成功していることになるであろう。

一歩進んだキャリア教育

三鷹第四小学校では、キャリア教育とともに「アントレ教育・起業家教育」も実施している。平成16年度の研究発表会に参加したので、その様子をお伝えする。四小には、青年会議所、地域企業の研究所、農家、商店、ボランティア等から成るNPO法人がある。この組織が総合的学習等を支える。研究発表会の司会は、NPOの代表者がつとめた。当日発表されたアントレ教育の報告は、「1年・おもちゃランドに幼児を招待」「2年・年近所の店で仕事を体験」「3年・ゴミなし大作戦」「4年・目指せ、バリアフリーの街づくり」「5年・銀杏を販売しよう」「6年・四小カンパニー」であった。5年と6年の内容は明確なアントレ教育となっている。成果を発表

する子どもたちの顔は輝いており、各種の質問にも自信をもって答えていた。「夢をはぐくむ学校づくり」に大いに参考になろう。

2004年の夏に、フィンランドのアントレ教育を視察した。セイナヨキ総合制学校では、カイサ・イソタロ校長の下に、「もてなし」をテーマにした総合学習をおこなっていた。誰かの誕生日を祝うとしよう。「お祝いのことば」「飾り付け」「音楽」「料理」等を「もてなし」の観点から工夫するのである。土曜日に訪問したイソタロ校長の学校には、日本人訪問客のために生徒が作った飾りつけ・料理メニューと日本人向けに改良されたレシピと音楽が残されていた。それに基づいて料理をつくり両国からの参加者で交歓した。別の小学校では、木材資源を有効活用するために「松の皮」を使って作品を作って、それを日本からの訪問客へ手渡してくれた。この学校では、児童の作品は商品である。作品の実社会における価格を適正に設定することも、教育の大切な目標とされていた。

起業家教育の先駆市であるバーサ市ではこの教育は幼児期より始まり大学まで及ぶ。幼児期・小学低学年では、創作活動、清掃や植物の世話、イベントへの参加、ストーリーテリング、工作、高学年では、よい行動を身につけ、コミュニケーション力、議論力を伸ばして自尊心と創造性を育む。中学では、地域の企業、経済のしくみ、起業家等とともに、各教科をビジネスに関連づけて学ぶ。高校ではグループ作業や職業教育を通じて、社会人・企業人として必要なスキルを磨く。大学ではさらに高次のスキルと起業家精神を学ぶ。

キャリア教育のポイント

静岡県においても、小学生が生き立ちを跡づけたり親の職場を訪問するなどして、自分の夢を実現しようとしています。このキャリア教育は、「13歳のハローワーク」の著者、村上龍氏の説く「大人になったら何かで食っていかなきゃいけない」が重要なポイントになります。一人立ちできる子どもに育てるのが何にも増した目標となるでしょう。

[文献・弓野憲一(編著)世界の創造性教育 ナカニシヤ出版]